
この星を守りました。

ミキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この星を守りました。

【Nコード】

N3149U

【作者名】

ミキ

【あらすじ】

二年目の若手高校教師、篠崎^{しのざき}壱雄^{いちお}は夏休み直前、政府の人間だと言乗る男からアメリカへ行けという指示を受ける。理由もわからず渡米した壱雄を待っていたのは謎の女性リンと壱雄の従姉妹だと名乗る赤髪の少女だった。

フレンドリーシグナル（前書き）

この物語はフィクションです。登場する全ての語は架空の物として
います。感想ももらえるとありがたいです。よろしく願いします。
五日間隔の更新を目標としています。

フレンドリーシグナル

私が失ったものは大きすぎたと今更ながら後悔しています。

戦争は終わりました。でも、私の中ではいつまでたっても、あの日から何も進んでいません。基地の人たちはだんだんと少なくなっていくって、今では終戦日にいた半分の人しかいません。みんな帰る場所があつて家族つていう人達がいて、幸せがあるんです。

私にも帰る場所があるらしいです。嘘だと思います。どこか適当なところから親のふりができる人を選んで、その人に押し付けるんです。そっちのほうがましで、もしかしたら実験体にされて、バラにされて、大きな水筒みたいなのにいれられちゃって、それでそれで、どっかの研究所に並んじやうんです。

だって私は兵器の一部だから。兵器は戦争が終わったら居場所なんかなくなっちゃって、標本にでもされるのが行く末なんです。

だから、私はずっと基地にいます。お金だつていっぱいあるし、なんとかかなると思います。なんとかならなかったら、私もそっちに行きます。待っててね、シア。

名もなきヒロイン その1

まるで孤島だった。

周りを見渡せば髪の色、肌の色、顔のつくり全てが違って、自分とは全く別の生物に思えた。

今、篠崎壱雄が立っているのは、アメリカ合衆国アイダホ州南西部ボイシ空港第3番ゲート前、である。

州最大の空港だけあって、ロビー前の人の流れはすさまじい。ゲートラウンジの、時代においてけぼりをくらった公衆電話と壁の間が、唯一の安息地だった。

羽田を発って7時間、日付変更線という名の時空を飛び越え、着いた先は、日本人どころかアジア人さえみられない、まぎれもない外国の土地だった。

アイダホ州は亜寒帯だから涼しいよ。

誰かが言っていた。

嘘だ。

みな軽装で半そで半ズボン。日本の夏と変わらない。目の前でつぶり肥ったおやじなんて、上着は前が開いたアロハシャツを着ていやがる。

正装で来たのは失敗だった。ワイシャツが水分を含み、体にまとわりつく。壁によりかかっているので余計に暑さが増す。夏に似合わないぬ真っ黒いスーツを身にまとう、それが周りとの温度差を高めていた。

そして、上着を脱ぐことを忘れるほど、壱雄はこの状況に焦燥しきっていた。

待ち合わせ相手が、いないのである。

「どうすりゃいいんだ……」

お待ちしております。では後日、また。

たしかにそう聞いた。壮大なドッキリだったりするとは思えない。予定していた時間からあと3分で1時間になる。同じ便で来た他の旅行客はひとり残らずこの場から消えており、いつの間にか、一つ後ろの便の客たちの雑踏でこった返していた。

イスに座って待ってればよかったものを、「一人でいると、なんとなく恥ずかしいから」という理由で隅っこに縮こまってしまった。こんなに遅くなるとは思わない。

遅れてきているのかもしれない。ちょっと離れているのかも。考えれば考えるほど可能性は無限大だ。そしてまた汗が噴き出す。

初めての土地。ひとりぼっち。自分以外はガイコクジーン。

落ち着け篠崎壱雄23歳。小心を克服するため教師にさえなったのだ。初めてのガイコクぐらいでびびるんじゃない。

壱雄（23）は手から脂汗を噴水させながら、スーツの上着のポケットから手帳を取り出す。

四月の初めからびっちりと予定が書き込まれている。友達の結婚式から飼い犬のエサの買い物まで。予定、でさえあればどんな小さなことも書かれていた。

小心から生まれた手帳だ。と壱雄は笑うが、一度、同僚に見せたとき、随分と感心していた。

——私もこんな風に手帳使ってみたなあ。すぐなくしちゃうんですよ〜。

相手は美人でタイトなミニスカートがよく似合っていた。ゆえに鼻の下はのびる。

——だったら、こ、今度一緒にいいやつを買いにいきませんかっ。勇気を出した。断られるのはわかっていたが、言わずにはいられなかった。自分を試したかったのかもしれない。同僚の女教師の左手の薬指には銀色のリングが光っていた。

結局、夫がいるから難しい、という予想と全くズレない答えを聞かされた。この誘いが成功していたら今頃どうなっていたのだろう。不倫、という一生自分には関係のなさそうな、昼ドラのようなドロドロとした人間関係を築けただろうか。

教師にもなれたのだ。不可能はない、と思う。そんな人生があってもいいはずだ。

ページをめくりながら、思いにふけっていると、やけに丁寧に書かれた一文に目が留った。

7月22日 待ち合わせ9時 アイダホ州ボイシ空港3番ゲート前 金髪 巨乳 美人

間違いない。時差調整した腕時計も空港ロビー中央に、でかかと掲げられた電光掲示板上の時計も誤差なし。10時を過ぎてから5分が経っていた。

空港には、大半が休暇を過ごそうと観光にやってきた老夫婦や家族連ればかりで、金髪で巨乳で美人は……。

吉雄は顔を手帳で隠しながら、横目で周囲に視線を送る。荷物受取場で肩を並べるカップル。ラウンジ横の自販機で背伸びをする少女。飛行機酔いで干物と化した老婦人。そして、

いた。

フロント前に金髪で巨乳で美人が一人、胸元を大胆に広げたシャツがまぶしく、体のラインが見て取れるタイトなジーンズは妖艶な雰囲気醸し出していた。が、どうみても夫らしき男性と一緒に、どうみても子供が二人、彼女の回りで走りまわっていた。

ありだと思えます。

吉雄はやっぱり人妻が好きだった。

メモを見返す。独身とは書かれていない。いや、しかし普通、家族でくるか？ いやいや、そういったカモフラージュかも。いやいや、やっぱりここで暴走するわけにはいかない。さきほどから、入口前の警備員が間違はなく距離をつめてきているのだ。

自分を客観的に観察してみる。黒スーツ、拳動不審、アジア人。

なにこれ、すごくやばい。

最近では空港テロよりも、人の多い市街地での無差別テロが流行だった。だからといって、みたところ「つばい」やつを見逃すはずはない。

逃げようか。追われることは必至。だが結局、この場においても「怪しい」という免罪符を掲げられ、連れていかれてしまうだろう。そんなことになったら待ち合わせができない。それどころか、連れて行かれた自分のせいで会えなかったといわれるかも。まだ見ぬ金髪巨乳美人に憤りを感じてしまう。

警備員とのエンゲージまで15メートル。そろそろ限界である。ここは意を決して家族連れに特攻をかますしかない。

頭の中でシミュレートを行う。「すいません、私の待ち人はあなたですか?」……これはないんじゃないか。そもそも相手が別人だったら、自分よりも相手の家庭がまずいことになる。「あなたはアジア人と会いたいと思っていますね」意味不明である。ここで自分の英語力のひどさを確認することができた。担当は数学だから問題あることもないが。

うつむいていた視線の先に人影ができた。顔をあげる。ああ君か。エクスキューズミサー?

終わった。思った以上に警備員は俊敏だった。いつのまにか目の前にいて、親指を後ろに向ける。

「プリーズフオローミー」

弁解の余地もない。

「えっと、あの、じゃなくて ウェル、アイアム、」あああ。

「イッチオーーーーー!」

入口のほう、丁度背を向けた方向から、ヒールを叩きつけながら近づいてくる足音と共に、自分の名前が絶叫された。絶叫の主は、

壱雄が振り向くよりも先に右腕に抱きつく。

「はあはあ、遅れてごめんねー」

日本語。それよりも二の腕にあたるこの感触。メモ通り巨乳である。

そして、腕に絡みつく豊満な体の持ち主を見やると、本当に金髪で美人がいた。日本人ではない。西欧系の顔のつくりをしている。

しかし、髪は生まれつきというわけではなく、染められたブロンドだった。根元が黒い。

「じゃ、いつきまつしょー」

「あ、はい」

女性は壱雄の右腕を引っ張ると自身を軸に強引にまわれ右をして、つかつかと、壱雄がつんのめっていることなどお構いなく歩きだした。

「ヘイ」

見過ごしてはもらえなかった。壱雄は警備員に肩を掴まれ、身動きがとれなくなる。

「痛いっ痛い」

「ちよつと！私路駐してんだから早く行きたいの！」

日本語だから通じないと思っただけ好き勝手言いなさる。ということには自分に言ったのかもしれない、と壱雄は思った。どうしろと。

金髪巨乳は警備員の前に顎を突き出し、見上げるようにして、

「警備員さん。今急いでいるの」「知っているだろ、最近治安が悪いんだ。こんな田舎でもね」「だからってこれからデートなのに」

「私も仕事としてやっている。彼が、もしテロリストだったら、どうするんだ。責任は全て僕にある」「民族差別だわ。お里が知れるわね。あなたの肌の色は何色かしら」「それこそ差別だ！撤回しろ」

「じゃあ、おあいこ。これでおしまい」「それとこれとは……」「ぎやーぎやー」。

聞き取れたのはここまで。回りを気にせず、肌の色から宗教思想まで、日本人の道徳本にガソリンをぶっかけて火を放つ様に、相手

を侮辱する。そのあとはスラング全開で、ほとんどの単語にファックだの、ビッチが修飾される始末。

「あーもうっ」

そのときだった、女とは思えない力で壱雄は抱き寄せられ、警備員の手が肩から離れる。そのすきに左手も右手とまとめてつかまれ、ものすごい勢いでひきづられた。壱雄はうつ伏せになりながら、顔に刺さらんばかりにつきだされるヒールに当たるまいと、必死に体勢を立て直そうとする。

「あーっはっはっはー。捕まえてごらんなさーい」

優雅なセリフとは裏腹にシニールな光景だった。雌ゴリラに連れ去れるアジア人。

警備員は追う気力を失ったかのように立ちすくんでいた。

名もなきヒロイン その2

「初めまして。私、こういうものです」

強引に引きずられながら、シャトルバス乗り場に、無断駐車してあった白いワゴンに放り込まれ、金髪巨乳も続いて乗り込んだ。そして、さっきのゴリラと打って変わってお上品に名刺を渡される。

「国際連合空軍作戦指令部大尉、ライン……キタノ？」

「リン・キタノ」

名刺から金髪巨乳——リンの顔に視線を移すと顔をかしげながら微笑んできた。

「父が日系2世で母がイギリス人なの」

なんて反応したらいいのだろう。ああ、だから日本語がお上手なのですね。とか？

「だから日本語が話せるのよ。うふふ」

うふふ。かぶってしまった。

「えーっと、聞きたいことが、」

「ちよつとまってね。……、だしていいわよ」

運転席にすわる、サングラスをかけた男は「オーケイ」とつぶやくと、体格に似合わぬ丁寧な運転を始めた。そのまま、リンと運転席の男は壱雄に聞かれないように、口早に短いやりとりを始める。

二人の間から、「ゆつくり」だとか、「静かに」「ぐらいしか、会話を読み取れるような単語が聞き取れなかった。特殊なアメリカ英語を、より簡略したようだと壱雄は思った。

これを機に英会話を始めてみるのもいいかもしれない。

自分が除け者にされているのは、正直気分のいいものではなかったが、その感情を悟られないように、二人には視線を向けなかった。右手の指に名刺を挟んだまま、掌にあごをのせ、景色を楽しむ。

あれだけ旅行客がいたのに、前にも後ろにも壱雄たちと同じ方向

へ行く車は見えない。綺麗に舗装された、まだそれほど日の経っていないアスファルトは、壱雄の乗る白バンのために作られたような気さえした。地平線までのびる黒い一本筋は、異世界への入口で、これから自分は謎の組織に瓶詰めに使われてしまうのである。

リンと運転席の男は会話が終わると、すんと口を動かさなくなった。ようやく仲間はすれをやめてもらえた。

ふいに思い出したかのように、リンはポーチから、半分ちぎれたPTP包装を取り出すと、

「これ、酔い止めの薬。ちょっと資料読んでもらうから、飲んでみようだい」

名刺を持っていた逆の手に、カプセル型の錠剤を二錠握らされた。「で、水」

後部座席に座っているクーラーケースから、ミネラルウォーター一本取り出すと、そのまま蓋をあけ壱雄の目の前につきだした。飲まなくてはいけないらしい。

壱雄は車酔いはしないほうだし、カプセル錠を飲むというのは、この年になっても慣れないことのひとつだった。したがって飲みたくない。

しかしリンの微笑みの裏に「どうした、早く飲め」という意思が見え隠れしていたので、しょうがなくカプセルを舌に乗せ、受け取ったミネラルウォーターで一気に流し込んだ。やっぱり、もどしそうになる。

「さあて、質問タイム」

リンは壱雄からミネラルウォーターを奪い返し、荒っぽくケースにしまいこむと、心底うれしそうな表情を作った。

「あなたの名前、年齢、職業をどうぞ」

「篠崎壱雄、23歳、高校教師、ってあの、」

質疑の方向が逆だ。

「担当の教科は？部活の顧問は何かしている？」

「……数学です。部活は女子バレー部で、」

「今年の抱負は？生徒から自分は信用されていると思う？」

「抱負……ですか？無遅刻無欠席を。信用は、わかりません」

質問の意図がわからない。

「なぜ信用されているかわからないの？それと、女子生徒を異性とみることはある？」

壱雄は言葉がつまった。動悸が激しくなる。なぜこんなことばかり。頭が痛い。

「あなたは女子生徒、いえ、年下を異性として、みれる？」
やめる。

「手に入れられない物を手に入れようとして、性的興奮を覚えることを知ってる？そんなことありえないと思う？」

体が宙に浮き、足元を天井に引つ張られていくようだった。頭の中で自分のいる場所がまるでわからなくなる。脳裏にモノクロで靄がかかった映像が右へ左へ流れる。うあつ、

子供なんて言い方、見下してるだけだと思うよ？先生。

君はちよつとおかしいよね。人を信じられないの？

いつまでもティッシュ握りしめて。そんなのだから第一志望も落ちるんだよ。

お前メンタル弱すぎ。レギュラーがとれないのもそのせいだ。
私はあなたのことがき

「つ、やめるオツ！」

自分でも口に手を当て目を見開いてしまっただった。こんな声がだせたのか。目の前のリンに向けて発していたが、リンの顔色に反応はなかった。

「な、なんでつ、こんなことばかり、いや、そもそも僕がしつもんを、」

うえ、

「ここ」

リンは、いつのまにか手にしていたビニール製の携帯ゴミ袋に、
壱雄の顎から鼻の頭を押さえ入れる。

盛大に、吐いた。

4時間前に食べた機内食が、リンのもつ透明な袋にぶちまけられた。

壱雄のゲロの滝が落ち着くの見計らい、リンはすばやく袋の口を結んで、さきほどのクーラーケースにしまいこんだ。カチリ、という音をたて、クーラーケースは厳重な金庫へとその存在する意味を変えた。

「こんなの、傷害罪よね」

言い訳のように、唇だけで笑う。

壱雄は脳みそが急速に冷えていく感覚と共に、自分が今どこにいるのか、どこを向いているのか、どうしてこんなことになっているのか、まるでフラッシュバックのように脳裏に描き出す。

体がうまく動かない。自分の体じゃないみたいだった。それでも両腕、両足、体の隅々の神経へ懸命に命令を送り続ける。必死だった。

リンの目には感情の色はなく、見慣れた風景を眺めるように、きれいな黒色で澄んでいた。意味のわからない恐怖よりも、目の前の女に対する憎悪が膨らんでいく。

「僕、殺されるんですか」

「それはありえないわ。あるとしたら記憶をいじられるだけ。ここ
で私たちと会った。何を話したか。何を見たか」

「こんなことして……。何がしたいんです」

「一週間前のこと覚えてるわよね」

右手の感覚を取り戻した。リンから見えないところで開いたり閉じたりして、と関節の自由握力を戻していく。

「このままおとなしくしておいてね。これ以上は痛い目には合わないから」

武器らしきものは右のポケットに入れてあるボールペン。

「目をつぶって、深呼吸して。そのうち楽になるわ」

言われたとおりにしておく。反撃ののろしをあげるには身が自由すぎる。

「聞きたいことがあるって言ってたわね。国連空軍のことかしら」
頭がぼーっとしてきた。体は自由になっていくのに、脳みそは茹であがったようにのぼせていて、リンの言葉も二割も頭に入っていない。

「三十年前、あなたや私の生まれる前、ソルトレイク上空5キロメートルに巨大な雲の固まり、確か直径1キロだったかしら。何日も浮いているから、地元放送局のニュースで毎日流れてたわ。一か月もたった日、ソルトレイクはもとも観光地だったのに加え、雲のせいで例年よりも観光客でにぎわっていたの。でね、みんな死んじやった」

リンは腕時計をみて、二十秒ほど黙り込んだ。そしてまた、息を吹き返したように、聞き手を無視した会話を始める。

「政府の発表はむちゃくちゃだった。西の新兵器の可能性だって言ったり、中東の核がふりそいだせいだ、なんてね。果てにはネバダの核実験場が起こした事故ということで、終わらせようとした。だけど、そんな嘘で収まるほど国民はマヌケじゃないのよ。あなたも知ってるように、地球外からの攻撃だってわかるのは攻撃から三日後。ネットに戒厳令を敷き損ねたのね。」

そんなことに人員も時間も割いてる余裕はなかった。アメリカへの国外からの批判は相当なものだったはずよ。四方へ責任をなすりつけようとしたつけね。それでも国連は動いた。頭であるはずのアメリカの信用は地に堕ちていたはずなのに」

壱雄は瞼を閉じたまま考える。小学校で教わることを、長々と説明することになんの意味があるのか。

「当時、常任理事国入りを果たした日本は、アメリカの行為と発言を、異常事態における情報処理能力の低下による国家レベルの伝達ミスだと庇った。国際連合は多国籍軍としてではなく、正式な国連軍を発足。これも日本主導でね。アメリカにとっちゃ飼犬にエサをもらう立場に逆転した、ところかしら。それだけ、攻撃は強力で断続的に続いた。猫の手も借りたいぐらいに。日本の上位陣が有能だったつてもあるわね。ここまではあなたも知っているはずよ」
もったいぶるというわけではなく、段取りとして重要な説明だったようだ。平和ボケした日本人を小馬鹿にしている、ともいえる。

——宇宙人が侵略してきたんだ。

小学校の先生は、いつまでも続いていた戦争を侵略と言った。配信サイトで常時流れる中継は、当時の日常で、平和な今現在とは非日常だ。海の向こうでひたすら殺しあう人間と宇宙人。一番古い記憶だと、二十万人は死んでいたはずだ。

本当に宇宙人なんていたのか、一般人には知ることのできないレベルの国家機密だとか、インターネットには妄想好きな人々の陰謀論で溢れかえっていた。

「開戦から十年たつても、戦況は変わらなかった。で、頼るものは少ないわけ。もう少して核を使うところだった。自国の土地で核を使うなんて許されるはずがなかった。ギリギリになって状況を変えたのはまたもや日本。台本があるかの如く、株を上げていく一国。日本人っていうだけでヒーローになれたわよ」

「リン」

運転席の男はドスの効いた低い声でリンを威圧する。

「いいじゃない。本当のことよ。それに私は、今でも疑っている」

窓に爆音が叩きつけられる。音の主は確認できない。

ここからが本題。リンがつぶやく。

「^{ナノゲイト}転送鏡って、知ってる？」

瞼を開けてリンの顔を窺うと、こちらをみず、真っ直ぐ前を見定めていた。

「ナノ級情報伝達及び複製装置。使用には、そうね、スーパーコンピュータ2台分をフル稼働させるぐらいのエネルギーが必要、てどこかしら。そんなシロモノは戦争の最前線では使えない。ならばどうするか。人間を代用するの」

リンの説明は言葉を省きすぎて、全くの意味不明だった。動かない脳みそが余計に悲鳴をあげる。いつの間にか、片腕の臨戦状態は解かれていて、体全体でリンの言いたいことを必死で理解しようとしていた。

「兵器の一部の代用に人間の脳を使う。その人間は疑似転送鏡ファルスナノゲートになって、大したエネルギーを利用せず、ホンモノと同等の能力を得るの」

「——それがなんなんです」

無意識下で口が開いた。かすれた声で。こんな時でも敬語になってしまう。

ふと窓の外を眺めると、二枚刃の軍用ヘリが自分たちと並行に、飛んでいた。ドアが全開で、射手が足を投げ出してこちらを監視している。

「……今は、もう無理そうね。寝なさい」

緊張がとぎれ、意識が沈殿していく。最後に視界に残ったのは、リンの疲れ切った微笑みだった。

ヘリの姿は幻だったのかもしれない。

名もなきヒロイン その3

一週間前、期末テスト最終日の放課後、テスト日初日に担当の数学は終わっており、既に生徒の3分の2の採点を済ましていた。職員室でもくもくと机に向かい続ける。夏の始まりはとうに過ぎており、蝉の必死の鳴き声は締め切った窓の外からも聞こえてきた。テストの採点は各々自宅なり喫茶店なりが大半で、人の少ない職員室は、余計にだだっぴろく感じた。

じじくさく茶をすすりながら、赤い油性ペンで丸とバツを書き込んでいく。

テストの結果はすぐに知りたい。学生時代、自分がそうであったように、生徒からはまだかまだかとせがまれる。いい先生であるために、できるだけ生徒の要望には答えようと努力するのは教師の務めである、それが壱雄の理想とする教師への希望かつ自論だ。正しいかはさておき、単に陰口を叩かれるのが嫌だった。

この2年間うまくやってきた。心配していた生徒とのトラブル、教師間でのいざこざ、ドラマや漫画で日常茶飯事で起きるもめ事が、自分の身に降りかかることはなかった、と思う。朝はちゃんと起きて学校に来れるし、授業も滞りなく予定通り進行している。

心配性のくせに平和すぎてあくびが出てしまうほどだ。

ひとクラス分がまたできた。きりがいいので、顧問をしている女子バレー部の練習を見に行こうと、それほど大きくもないリュックに、教科書やらテストの束やらをぎゅうぎゅうに詰め込んでいる最中、電話がなった。

電話は各学年の学年主任の机に一台づつ置かれ、全て違う回線につながれている。もともとは一回線のみひいていて、職員がそれを共有し、平等に受けていた。しかし、世の中の親共は暴力的な思考、それを省みないモラルの低下とあいまって、非常にどうでもいい連

絡の割合が多くなり、学校側はその尻拭いを、教員にさせることにした。その結果が回線の増設、各学年の教員が担当することにより、「問題が起きた学年が責任をもつて解決へ従事すべきである」と一方的なおしつけをした。

鳴っている机は自分と同じ2年の学年主任。そして机の主と他の担任たちは不在。よって受けるのは自分である。

なるほど、これはまずい。

過去に、教師の一人が生徒を誘っているんじゃないか、という苦情の電話に対応したことがあった。その根拠が毎日ミニスカートをはいてくるから、である。このままでは生徒が授業に集中できず、成績を落としてしまったり、最悪その教師との関係ができてしまつたら……。しつたこつちゃあない。ちんぼしごいてから登校すればいいじゃないですか。なんて言えるはずもなく、はあだの、ええだの気のない返事で2時間耐えた。

それからだ。職員室では一人になることを恐れ、自分より電話に近い人間がいなければ、他の場所で時間をつぶすようにした。部活の顧問に自ら名乗り上げた理由の一つだったりする。

今日は油断していた。部活に顔を出しておこうと、採点に必死すぎた。選択肢は存在しなかったのに、もやもやとした後悔があった。呼び出し音は6度目をコールした。

流石に周りの視線がいたい。人がいないわけではないのだ。ただ彼らは1、3年生の担任だったり担当の教科しか授業を持たないわけ。無言の圧力を感じる。遅れちゃってでれませんでした作戦は無理があった。

しぶしぶ電話に出ようと近づくと、職員室手前の扉から、今年で干支5週目を迎える学年主任（禿）が入ってきた。

「あ、遠野先生、電話が鳴ってます」

じゃあとれよ、なんて無粋なつつこみはいれず、学年主任は、気のいいおっさんのように、はいはいなんて言いながら、小走りで近づいて受話器を持ち上げた。

「はいもしもし、都立芹ヶ丘高校です。……はい、篠崎先生でございますか？はい、おります。今変わります」

結局、自分に用があるお電話だった。

ついにこの日がやってきた。自分が原因のトラブルだ。賭けてもいい、十中八九、セクハラ云々だろう。先日、受け持っているバレ一部で少々事故が起きた。相手は大丈夫だから気にしていないから、と言っていたが、やっぱりアウトだったようだ。油断していた。

「変わりました、篠崎です」

『重要案件です。他言しないことを誓えますか？』

「はい？」

とりあえず、相手が不在の賭けには敗北した。

「あの、失礼ですが、どちら様ですか？」

『他言無用です。こちら、日本政府外務相のトミタ、と申します』

電話の向こう、歳は20〜30ほどのトミタと名乗る男は、濁りなく淡々としたしゃべり方だった。

「い……たずらですか？」

となりで聞いていた学年主任も、またか、という顔をしてさつさと職員室からでて行ってしまった。指名制のイタズラ電話なんて、肝が据わっていやがる。

『信じてもらうにはどうしたらいいでしょう』

マニュアルがあるのか、慣れたように聞き返してきた。

「じゃあ、僕のプロフィールを言えるだけ言ってください」

『少々お待ちください……』

どうせ名前、年齢、住所ぐらいだ。イタズラにしてはそれっぽかったが。

相手の返答はすぐだった。

『よろしいでしょうか。それでは申し上げます。篠崎壱雄、23歳、独身、町乃江市2-3000桃山パーク202号室、好きな食べ物はヤキトリの缶詰、嫌いな食べ物はゴーヤとカニカマ、』

おかしい。ゴーヤはまだしもカニカマは知っている人間のほうが少ない。

『両親共に御健康。お二人が外国での研究職のため、6歳から祖母の実家でお過ごしになられ、大学入学から祖父母の実家からはなれ、独り暮らしをされてますね?』

「そのぐらいならちよつと調べれば……」
動揺していた。ストーカーかこいつは。

『これ以上の情報は篠崎様の気分を害する恐れがあります。一目で嘘ではないという証明がございました。携帯端末はお持ちですね?』
既に害しているし、持っていること前提で話を進めてくる。いや、知っているのか。

壱雄はリュックの奥深くで、月に一度しか日の目をみない、手元に収まる程度のソレを取り出した。大学入学祝いに両親から送られてきた、純日本製の電子情報端末だった。今では型落ちしており、子供の小遣いでも買えるが、当時はサラリーマンの初任給並みの馬鹿高さだった。毎月の携帯代、端末代、アパートの賃貸料、各種自動引き落としの確認にしか使っていない。日々の生活には携帯電話だけで十分である。基本料安いし。

『壱雄様の口座の残高確認をお願いします』

口座ページに設定した、空間三点指認識の記号を、親指から中指までの三本で空間に描く。ちよつとだけ、頭の隅のほんのちよつと、今何が起きているのか予想できていた。

アプリを起動、三本の指先が頂点の正三角形を作り、モニタに向けてくるくる回す。パスワードの4つの数字を打ち込む。残高を、確認。

『ご覧になりましたか?』

自分の給料が子供の小遣いに思えた。冗談、では済まされない額が振り込まれている。一生働き続けても得られるかわからない、そ

の数字の羅列は悪魔の笑顔だった。電話の向こうから何か聞こえる。人の言葉なのかただの雑音なのか、既に壱雄の脳みそには判別不能で、思考の全ては目の前のディスプレイに映る莫大な数字に支配されていた。

「これって」

ようやく言葉が出たと思ったら詰まった。次の言葉が思いつかない。

「これってなんなんですか」

『電話ではお話できません』

外でセミが鳴いている。

トミタの言葉はずっと無表情だった。感情を押し殺しているのか、そもそもそんなもの存在しないのか。人ではないという線も捨てきれない。

『委託を受けてお電話させてもらっていますので。最後に伝言がございます』

わけがわからないまま、終わろうとしている。

『7月22日、待ち合わせ9時、アイダホ州ボイシ空港3番ゲート前、金髪、巨乳、美人、来るか来ないかの選択は自由。このことです』

いったん間をおいてから、ポケットにいつも忍ばせている、ぐにやぐにやに曲がりくねった手帳を取り出す。ボールペンが挟まれたページを開く。

「すいません、もう一度お願いできますか？」

耳元で繰り返して聞こえてくる外国の名前。来るか来ないか……。平穏が好きで一生そのまま、死ぬまでずっと、何もなければいいと思っていた。でもそれは嘘で、人間は刺激がなければボケてしまう。もしかしたら普通の人間以上にそれに対して貪欲なのかもしれない。

壱雄は心に決めた。

『ご質問は？答えられる範囲なら』
「アイダホって涼しいんですか？」

名もなきヒロイン その4

「おきてーん」

目を覚ますと腹のあたりに、絡みつくようにして上目を見せる女の顔があった。

「もー、壱雄さんたらお話の途中で寝ちゃうんだもん」

「え？あ」

身を起こそうにも、リンがシートの側面から身を乗り出し、頭をこちらに向け、ほとんどの体重をのしかけてきているので思うように動かない。

このポジション、股間のあたりに組んでいる腕を乗せられているので、とても敏感。寝起きもあいまって大変なことになってないか余計に焦る。

「すいません、あの、そこ」

「あ、ごめんねー。寝顔がかわいいもんだからついうつとり」

リンがそこをどいて、シートレバーを容赦なく引っ張る。思いのほか強い力で体を起こされた。

窓の外は暗かった。

自分の影が映り、ガラスがそこだけ透明になって暗闇がみえる。

窓から少し顔を放すと、自分のひどい顔が映った。寝起きの不細工にむくれた、というよりも、げっそりした、生気のぬけ落ちた気味の悪い面。口の中にはすっぱくて臭みのある、酒を飲んで歯磨きをせずに寝た次の日の朝のような気持ち悪さがあった。

いつから寝てしまったのだろう。

バンに乗ってから、すぐに記憶が消滅してしまっていて、気がついたら現状に至る。飛行機に乗ってる間、ほとんど睡眠をとらなかつたせいだ。

緊張が解けて眠気のみこまれたのだ。

納得。

「ひどい顔だね、水をあげよう」

運転席に腕を伸ばしペットボトルを捕まえてくる。キャップをあけて渡してきた。

水。

心の中で嫌なものが膨れた。ひどいトラウマのような、このシュチエーション、デジャヴを感じる。だけど全く思い出せない。思い出そうとすると、眉間のあたりがちくちくするし、ひどく気分が悪くなる。

「？、どうしたの？」

「なんでも。いただきます」

中身は普通のミネラルウォーター。おいしい。現実的な味がする。

「さて、じゃあ降りましょうか」

あれ、という声が漏れた。ここが目的地だったのか。

「と、その前に」

ドアノブに手をかけたままこちらに向きなおす。

「私の名前、覚えてる？」

間ができた。即答しなくてはいけないような雰囲気なのにもっとしてしまう。下の名前、ファミリーネームは……。

「、リン・キタノ、さん、ですよね？」

「職業は？」

忘れた。というよりも教えられてない、と思う。

「——業……。違、教えてもらいましたっけ？」

ぎゅつとにぎる掌に池ができる。壱雄は悪いことをした子犬のような目で許しを請うた。

「教えてなかったみたいね」

リンは自身に言い聞かせるようにして、納得した表情を作った。それからしばらく、時間がたった。唇から顎を両手で覆い、視線を落としながら、深く思索しているリンの姿は絵になる。

やっぱりこの人、すごくきれいだ。

壱雄は目が合わないのをいいことに、ここぞとばかりに容姿をチ

エックする。

一重まぶたは父からの、日本人の血だろうか。勝手な印象だが、白人には少ない気がする。胸やら尻やは雑誌に載ってる写真を切り抜いて3Dモニタした感じ。特に、胸がすごい。巨乳は正義だ。それは揺るぎない事実で、現に亓雄が胸元へ憧れに近い、熱い視線を送り続けてしまっている。

「リンさん？」

彫刻のように固まりきってしまったリンを見ると不安になってきた。

「ごめんなさい」

不安はより膨らみを増し、謝罪の言葉が自然と口から洩れた。

「謝るようなことはないわ。疲れてるもんね。ちよつと記憶がぼやけててもおかしくないわよ」

ところどころおかしい。何かが噛み合わさってない。

自分はバンに乗った。

そこで名前を知った。

会話らしい会話はした覚えがない。

名刺？

記憶の泥沼から抜けだそうとしたその時、

[illegible]

壱雄はぎよつとして背をそらした。勢いあまって窓に後頭部をぶつける。警報機のように鳴り響くその正体はリンのポーチから姿を現した。

無線機。かなり旧式のそれは非常にシンプルでつまみが3つ、液晶もない。

「緊急回線なんかつかって、なにっ!？」

リンも驚いて応答する。

「……また？5分で捕まえて。というよりそんなことで回線使わないで。……ああそう、いいわよ。それならそれで何時間でも待つわ。どうせ区内のトイレの天井に穴開けて遊んでるわよ」

ぶちっ。相手の応答もまたず、後部座席にぶんなげる。半ばやけくそだった。

「いやなところみられちゃったわね。ほんと、最近疲れてて、あー、もういいや。どうせ後ではれるんだし。もう、いこいこっ」

ドアノブがひかれた。パワースライドを無視して人力で無理やり開ける。外は、

外は駐車場だった。地下駐車場。車内からはライトで反射してほとんどわからなかったが、とよわよわしい灯りがとまり、点々とあらゆる軍用車両があった。

「ようこそ国連空軍総本部へ」

職業は国連空軍、大尉、リン、

「いまので思い出したかな」

リンは壱雄のほうを振り向きもせず、暗闇へと歩を進めて行った。

いったいどれだけ広いのだここは。

暗闇が目慣れきれるまで、あっちへふらふら、こっちへふらふら、何度もリンの背中を見失いそうになった。それでもリンは待つてくれなかった。

ついていくこと5分、ようやくエレベータの前までたどり着いた。エレベーターの階数表示のランプに視線を向け、自分の存在なんていないものとしているようだった。

やっぱり怒っているんだ。

だって、そうなのだ。自己紹介を、それも、ものの数時間で忘れてしまうなんて。社会人とか、そういう前に人間として失格だ。そうだ、確か名刺をもらったはず。右のポケットに手をつっこむと、ペン先が突き出たボールペンとS字に曲がった手帳、そして掌に収

まる薄くて堅い紙。

国際連合空軍作戦部大尉、か。

いったい国連様が自分になんのようだ。

戦争は終わったのだ。母の妹、おばにあたる人がどこかの軍事企業の開発部門に参加していたが、そんなこと自分に関係あるのか。そもそも、おばは十年前に死んでしまった。

後でばれると言っていた。呼ぶ前に教えてほしい。

——本当はね、宇宙人との戦争が終わったなんて嘘。今も世界中の国々で四六時中侵攻されていて、ヒトという種が生き残れるかどうかという瀬戸際なの。でねでね、あなたを呼んだ理由は、あなたは超能力が使える最後の人間だからなのよ。みなさい、ほら電磁流量計がびんびん反応してるでしょ。あなたは選ばれた人間なの。あなたの力でこの星を守ってほしいのよ。

全力で逃げ出すだろう。

「はぁー」

びんぽーん。

赤さびを禿げた塗装で誤魔化した重々しい扉が開く。中は普通のエレベーターよりも奥行きがあり、何人もの人、もしくは車一台すっぽり入るような空間が広がっていた。リンは扉横の階数ボタンを押すと、足早に一番奥の壁に体を預け、タバコを吸い始めた。

「いいんですか？煙」

「このエレベーター、古すぎて探知機効かないのよ」

ふっと白煙を吐き出す。たちまち視界が霞む。

「我慢はよくないわよー。あなたも吸う？」

目の前に一本差し出される。

「僕は吸えないんで、ごめんなさい」

謝ることもないんじゃないか、というより今の時代、吸える人間の方が奇異である。同僚にも一人もいない。

「質問、いいですか？」

我慢はよくないのだ。そしてこの雰囲気、今がチャンスである。
「なんで僕はここに、呼ばれたんですか？」

エレベーターが、動き出した。

「え？聞いてないの！？」

「……はい」

「よくここまで来たわね……。日本から出るの、初めてでしょ？」

「来る前にもらった電話だと、自分は代わりの人間だから言えない
って」

「まったく、あいつらも必死ね。たいしことじゃあないわ」

リンはうふふと笑う。つられた壱雄もうふふと笑う。

「たいしことじゃあないわよ」

「はい」

「うん」

「えっと」

なるほど、来るべきではなかったのだ。

「いいことじゃないんですね……」

「それは、人によるわ。あなたは——どうかしらね。私は向いてい
ると思うけど」

「向いてる？」

それはあとのお楽しみ。二本目を早々吸い終わり、隅の塵の山へ
投げ捨てた。

扉が開くと、青眼の若い男が一人、待ちくたびれた様子でつつた
っていた。

「うわ、けむっ！だから吸わないでっていでしょーが！」

「だあって宿舎練ぜーんぶ禁煙なんだもん」

「ここは喫煙所じゃないですっ」

「知ってるわよ〜」

台詞の割に横暴な態度だった。タバコの箱をお手玉すると、男に軽く投げ渡した。

「え？え？」

「うっさいから禁煙する」

「今年に入って五回目ですよ、それ聞いたの」

「私い、地球代表リン・キタノはあ、正々堂々禁煙をするとお、ここに宣言しますう」

「はいはい、あーそれと」

男はタバコの箱を胸のポケットにしまい、こちらに体を向けると姿勢よく愛想よく、

「篠崎、竜雄さんですね？私、特殊作戦軍中尉シュトルヒ・ブックです。お見苦しいところをお見せしてしまい申し訳ありません」

「いえ、そんなこと」

「見苦しくないわよ」

リンはシュトルヒの脇を小突く。

「それじゃあこちらへ」

シュトルヒはリンを無視してエレベータから伸びる、一本道を率先していった。

廊下には、窓がなかった。古びた鋼鉄製のドアが左右に一定間隔で点在し、それにあわせて蛍光灯、通気口が天井に張り付いている。外が見えないというのは強烈に狭小さを感じた。

エレベーターに乗っている間、重要なことに気付かなかった。昇っているのか、降りているのかまるでわからなかったのである。体が感知できていなかったのだ。

「あの」

「どうしたの？」

答えてくれるかわからない。

「ここって地下ですよね」
間。

「そつよ」

初めてまともに答えてくれたような気がした。

壱雄が少し驚いた顔を見ると、リンは胸の前で×を作る。

「これ以上の質問はなし！」

シュトルヒが振り向きもせず、

「いまさらですか？」

「そうよ、責任もちたくないもん。上に文句言われんのは私なの。わ・た・し！」

「いまだに根に持ってるんです？ 作戦云々はリン大尉の好きにしていって言ってたんじゃない」

「こんなにめんどくさくなるとは思わないでしょ。それにあんた」
後頭部に必殺チヨップ。

「口が過ぎるわよ」

シュトルヒは被害部位を左手で押さえつけ、壱雄に聞こえないくらい、小さな声で何かをつぶやいた。

名もなきヒロイン その5

それじゃあ私はクソ禿に呼ばれてるから。

6 畳もないイスと机が置かれた部屋に通されると、リンはそそくさで行ってしまった。

「大尉は悪い人じゃないんです。ただちよつと、最近はつかれてい
るみたいで」

机を挟んで向かいあう二人の沈黙を破った。

「……はは、そうなんですか」

会話が續かない。

壱雄は指を組んでもじもじさせる。落ち着かない時、緊張からくる不安で指をひたすら動かす癖があつた。祖父母からはみつともな
いと言われ、直そう直そうと努力してきたつもりだが、一向に収ま
る気配はない。一生無理だろうなと、半ばあきらめていた。

「あの」

「はい」

「この部屋で僕は、何をすればいいんですか？」

自分の指の失態を誤魔化すように口を開く。

「待つててもらえればいいですよ」

誰を。

とにかくこの落ち着かない状況から脱却したい。初対面の男と無
音の部屋で過ごすなんて、気が狂いそうだ。

「トイレ行ってきていいですか」

男子用トイレは右手を真っ直ぐ行つて突き当り左すぐ。
あつた。

個室へ入ると、すぐさまパンツをずりおろす。

やっと一人になった。

最後にトイレにいったのは、飛行機に乗る前で、そうとうたまっていたはずだが、そんなことも気にならないほど、ひどく精神を摩耗していた。

腕時計は十五時を示している。

帰りの便はいつとろうか。というよりいつ解放されるのだろうか。本当に自分は超能力持ちで、利用されようとしているのはあながちマジなのかも。

アナログの針が刻む音が心地よい。永遠に続きそうで気を楽にしてくれる。待っているのも長くなりそうだし、少しだけここで休憩させてもらおうか。壱雄は手を組んで肘で土台をつくり、甲の上に顎を乗せた。

その時、息を吸い込む音が聞こえた。

ゆっくりと天を仰ぐと、

「誰か、いる？」

腰が抜けた。

半世紀前の世間一般が想像するような宇宙人が、通気口の格子の奥から頭を覗かせていた。

「うひゃあ」

壱雄は悲鳴にもならないまぬけな叫び声を上げると、パンツとズボンをずりあげ、扉を背にして、床にへたりこんだ。

大をしなくて本当によかったと思う。

「逃げないで」

宇宙人の日本語は大変達者で、扉の鍵を開けることすら困難な壱雄の耳にもちゃんと届いた。

「助けてほしい」

大きな頭に昆虫のような巨大な眼。年末の特集に出てくるようなそいつは、短い呼吸を繰り返しながら苦しそうに助けを求めてきた。

「引つ張ればとれそう」

壱雄は格子の隙間に指を通すと、体を持ち上げ全身の体重をかける。便器の蓋から足を放して、完全に体を浮かしてみたが、なかなか現実には厳しい。四隅の金具は見た目以上に頑丈だった。

諦めて便器に座り顔だけ上に向ける。

「誰か呼んでこようか？」

当たり前の提案を試してみる。

宇宙人は短く一言、

「だめ」

宇宙人の顔が横にふるふると揺れた。

落ち着いて声を聞いてみると女性のようだ。それもかなり若い。

そしてグレイタイプの宇宙人ヘッドは戦闘機用のヘルメットに見える。吸引ノズルは外されていたが、タコの口が見てとれた。

「なんで？まずいの？」

宇宙人改め、覆面少女は黙秘権を行使。

「悪いことしてるんだつたらやめたほうがいいよ。軍ってそういうの厳しいんですよ？」

そもそも、なんで子供が基地なんか。

「僕、そろそろ行かないといけないんだ。人を待たしてるからさ、」

「うそつき」

くぐもった声が聞こえる。

「ちょっとこのままいようって言ってた。うそついてる」

「え？あ、声に出してた？」

ヘルメットが格子にぶつかった。壱雄は縦に首を振ったのだと思っただ。独り言を他人に聞かれ、淡い羞恥心が湧いた。話を切り替える。

「なんで僕に助けを求めたのさ」

覆面少女はまたしても黙秘、ではなく思索しているのか、少しだ

け間を開けてから言った。

「あなた、見たことない人だから」
「なんだよそれ。」

壱雄はため息をつく。この国へ来てから変なやつばかりだ。自由の国は精神構造まで自由なのか。まったく、日本人には理解できない。

「助けてくれないと」

「なんだよ、宇宙につれてっちゃうのか？」

「おしっこもれる」

「しょうがねえなこんちくしょう。」

壱雄は一度個室から出ると、辺りを見まわし、目的の物を探す。

あそこだ。トイレの掃除用具入れから、柄が丈夫そうな金属合金のモップを選ぶと、コスプレ少女が待つ個室へ戻った。

「逃げたと思った」

「逃げたってなんだよ。何から逃げたんだよ」

「危機」

「それはお前の股間だろうが」

壱雄はモップのヘッドを天井に向けると、うまく隙間に入り込めるように角度を決める。

「顔、ひっこめて」

覆面少女は音もなく通気管内を後退していった。

ヘッドを格子に沿うように通すと、九十度回転させ、引っ張っても落ちてこないようにする。

「何するかわかった」

「ちよつと黙ってて」

気楽なものである。自分はこれで器物破損罪がつく。そう思うと、手が止まった。

「ねえ、本当に人呼んできたらだめなの？」

「だめ。……あなたがこれを壊したのが見つかったら、ちゃんと私が庇う」

管を反射して声が届く。

「おねがい」

初めて下手に出た。最初からその腰の低さでお願いします。

「……わかったよ」

もったいぶってから返事をした。

ドアを開け、そのドア上部で接する金止めをモップの柄の支点にして、壱雄は個室の外でモップの柄の一番端っこを持つ。こうすることで自分は力点となり、ヘッドと格子の合わさる場所が作用点となる。問題はドア止めの金具とモップの強度。

壊れたらこいつのせいになろう。

覚悟を決めて力を込めた。

日々の筋トレが生きた。

めきつばきつばこんつ。

モップは盛大に折れ曲がり、金止めは豪快にひしゃげ、そして通気口の格子はピンを元気いっぱい弾き飛ばすと、そのまま便器の蓋の上へと落下した。

やりすぎた。

体中に冷気が通り過ぎる。壱雄が音にびびってちじこまっていると、後ろでヒールの叩く音がした。

「あはは、やりすぎ」

壱雄は真っ青になって振り向いた。

そこにはイタズラを覗いて先生にちくるかどうか、絶対的な力を持つ子供がする悪い顔をしたリンがいた。

「あの、見てました？」

見てましたもクソもない。未だにモップを持ってる時点で現行犯である。

「声だけね。さっきから聞いてた」

だったら止めてくれ。壱雄の願いはむなしく、時すでに遅し。というか、止めなかったリンも同罪じゃないか？壱雄は心の中で仲間を求める。

通気口の方を見ると宇宙人の姿はなかった。

逃げやがった、あいつ。

「ほら、出てきなさい。壱雄君の弁護はあなたしかできないのよ」
リンは腕を組んでその方を見上げる。

「私が頼んで壊させました彼には何一つ悪意はありません私のせいですごめんなさい」

さつきよりも遠くから聞こえた気がした。躊躇なく敵前逃亡をするあたり、本気でリンが苦手なのだと思つた。

「トイレ、したいんですよ？」

あつ、という声が漏れた。

「今回は何もしないわ。だから出てきなさい。あなたを待たせているのは、私たちの他にもいるのよ」

「嫌。どうせお金が目的の悪い奴」

「あなたを助けてくれたのに？」

「え？」

壱雄と少女の声が被つた。

通気口から宇宙人が頭を垂らした。そして、

「この人？」

首が落ちた、ように見えたのは戦闘機用のヘルメットで、真つ赤だった。

赤毛、なんてものではなく、血液のような深紅の髪。染め上げたとしてもここまで美しく栄えるかはわからない。それほど人間離れしている。

歳は十五、十六ぐらいだろうか。自分の教え子達と同じぐらいに見える。

「で、彼女が、えーっと、僕に用があるんですか？」

目の前の宇宙人よりも異常な存在に目が奪われ、言葉がちぐはぐになる。

リンは当たり前のように

「そうよ、彼女があなたの従姉妹」

「え？」

「それでね、あなたに彼女を引き取ってほしいのよ」

「は？」

さらりと言った。

なんということでしょう。 亓雄の脳みその処理がおいつかない。
「どうということ……？」

リンのほうを向きなおす。

「彼女は従姉妹、あなたは保護者候補
ね」

リンは片目を閉じた。それがウインクだと理解するのに十数秒かかった。

赤髪の宇宙人は自分が当事者だとわかっているのかいないのか、
するりと舞い降りると無表情で、

「おしっこ」

ドアを、閉めた。

「あ、僕部屋に戻ってますね」
全力で逃げ出そうと思った。

名もなきヒロイン その6

結局、全力で逃げ出すなんていう根性はなく、そもそもここがどこかわからないうえ、軍の施設ということもあり、おとなしく捕まることが得策なのである。

「初めましてのあいさつ〜」

六畳間に4人が押し詰められ、やけにテンションの高い女が一人、非常に鬱陶しい。

自分の隣にリンが年甲斐もなくはしゃいでいて、向かいにはシュトルヒがニコニコとしている。こいつもあちら側の人間であり、自分をはめた一人である。そして渦中のヒロイン、そのとなりに座る少女は病的に無表情だった。

「なんで言わなかったんですか」

「ん？何が？」

「この、宇宙、じゃなくて女の子が僕の従姉妹？で、それでここまですんだ理由が僕が保護者候補でそれで」

「それでそれでうるさいな！。そんなの決まってるじゃない」

リン、快晴の笑みで、

「見てて楽しいからよ。あなたの反応が！」

壱雄は思う、すごい楽しそうだな、と。こんなにひっぱっておいで、あなたは世界を守る超能力者でしたあ！ばばん！なあってやられても、実際拍子抜けといえは拍子抜けな気もしないでもない。

だから不意打ちだった。

「ちょっと待ってください」

「待ちません」

「え？いやあの重大なことを思い出しましてね」

リンが眉間にしわ寄せる。

「僕には従姉妹はいないはずなんですがね」

言ってやった。

壱雄自身この状況についていけない理由があった。

母には妹がいた。当たり前だがその妹は自分の叔母にあたる。その叔母にもし娘がいればそれは自分の従姉妹である。ちゃんちゃらおかしくない。ちゃんちゃらおかしいのは叔母には娘どころか夫さえもいなかったはずだ、ということだった。

「そんなこと知ってるわよ」

リンは、何を言ってるのかしらこの子、熱でもあるのかしらねえ、とでもいうような、哀愁ただよう同情めいた顔を見せる。

何を言ってるのかわからんのはあんたのほうだ、と壱雄は思う。従姉妹がいないのを知っている？従姉妹という存在は一般世間では親類中に認知されるものであり、相当な理由がなければ、たとえば望まずに産まれた子であつたりだとか、

「もしかして隠し子？」

口に出してから気付いたが、本人の前で言うべきことではなかった。が、それでも眉ひとつ動かさない。

感情あるのかこいつ。

「そのへんはおいおい本人から聞いちゃって。それよりも話を進めましょう」

リンは立ち上がり、壱雄と少女が向かい合う机の横に立つと、

「自己紹介ね、自己紹介。本名年齢趣味特技所属部署に階級、言いたいことを好きなだけいいなさい」

ほら。と壱雄に目を向ける。

いったん間をおいて、

「篠崎壱雄23歳。趣味は……旅行と博物館を見て回ったりだとかで特技は、うーん、球技かなあ。今は高校の教師をやってます」

敬語。所謂お見合いってやつかこれは。いい年こいてこの茶番、死ぬほど恥ずかしい。

つきささる少女の視線が痛い。この部屋に入ってからというもの、

少女はずっとこちらをみつめている。壱雄が嫌になつて視線をはずし、泳がせるほどに。教師として恥じるべきことであつた。

目の先が部屋を一周し、少しでも少女の顔を窺う。自分のプロフイルにクソほど興味ないのか、その人形じみた顔色は変わらない。少女の口が開いた。

「篠崎紅葉^{もみじ}」

以上。

「あらあら、もみじちゃん？まだ年齢趣味特技所属部署と階級その他もろもろが言えてませんよお」

リンは覆面少女改め篠崎紅葉の頭に手を置いた。

「ちよつと緊張しちゃつたのかな？」

男子トイレで見ず知らずの男の前、板一枚挟んだ先で小便するようなやつが、こんなことで緊張するのかと壱雄は思った。

紅葉が嫌悪を示していた、保護者候補という存在。先ほどのトイレでのやりとりでは、もうちよつと感情の起伏はあつた。仮にだが、自分の保護者候補という身分、これを隠したままであれば意思の疎通をはかれたと思う。

高校教師という肩書ではあるが、まだ新人だし、歳の差から言えばほとんど生徒とは変わらない。自慢じゃないが、精神年齢は高校時代から変わつてないような気がする。だから心閉ざす少女にあれやこれや頑張つたとしても、いいようにことは進まないだろう。そもそもヘルスケアの資格を持つようなプロとも違う。学校の先生は所詮、勉強を教える立場であつて、社会のなんたるかを偉そうに言える立場ではない。

だから諦めた。

なんだかんだ理由をつけたが、言いたいことはただひとつ。

「本人が嫌だつて言ってるんで僕は、その、保護者候補つてのには向いてないんじゃないやあ……」

「んなことないわよ」

即答である。

「さつきも話している感じだと仲良さそうにしてたじゃない。珍しいのよ。この子が妙な心の壁を作らないで人に接するのは」

「でもそれは、彼女が緊急事態だからであって」

「この子の腕力ならあの格子壊せられるわよ」

「え……、え！？そうなの！？」

紅葉の方をみやる。が、無表情。

「あれ、そうとう堅かったし、体勢的にはきついですよ」

壱雄自身それなりに身長はあるし、それに見合って体重は軽くない。あれだけ全体重を、そのうえ反動までつけたのだ。見るからに華奢な紅葉には到底ありえないことだと壱雄は思った。

「なんで僕に頼ったの」

おかげで前科一犯である。

「初めて見る人だったから」

またそれが。

リンが口を開く。

「そういうことなのよ」

壱雄にはリンにも理解できていないように思えた。

「お気に入りみたいね。じゃあ紅葉ちゃんも壱雄君も同意ってことで」

「僕はそんなこと一言も言ってますんよ！」

「なんでよー。こんな可愛い子なのに」

「可愛いとかそんな問題じゃなくて」

「私は、」

紅葉が割って入ってきた。

「私は行かない」

「ええー。なんでよう」

その時、紅葉は上を向いてリンの手を払いのけた。そして、リンは驚いたように紅葉から一歩ひいた。横では、シュトルヒは顔を傾け口角を釣り上げた。

「シアを、待ってるから」

シアって誰だ。

そんな疑問を口にする間もなく、リンの顔色は見てわかるように変わり、頬の筋肉が硬直、そして壁に背を預け紅葉との視線を交える。

「特殊作戦軍篠崎紅葉中尉」

口調が変わった。

「壱雄君と一緒に日本へ帰りなさい」

絶対的な軍人としての命令。自分の意見など言える状況ではない。壱雄の鈍い感性で感じ取れるほど、場の空気が張りつめていく。組んでいた指がせわしなく動き、汗で滑った。

「なんで」

紅葉の表情に変化が現れた。

「みんなシアのことを忘れようとするの。あんなに頑張っていたばいっばい敵を倒して、それで……」

声はゆるやかに震えを増し、目には涙を浮かべる紅葉があった。

「死んでない。絶対そう。シアは帰ってくる」

言いきると同時に頬に雫が流れ、机の上に跳ねた。

「もついい」

袖で涙をぬぐい、リンを押しつけて部屋から飛び出て行った。そのまま秒間、誰も動かなかった。シュトルヒはたったの一瞬、壱雄に目を配ると、おもむろに立ち上がりドアの前に立った。壱雄には顔をそむけて、まるで感情を読み取られないように。

「私が追います。篠崎さんとキタノ大尉は待っていてください」

壱雄から見て、シュトルヒに焦りはなかった。ただ、そういったどんな場合にも冷静沈着な軍人の鏡なのか、それともこの事態に陥ることを予測していたのか壱雄にはわからなかった。

シュトルヒが出ていくと、リンは開口一番、

「はあー。失敗かあ」

大きなため息とともに紅葉がもといた席へ座り、後頭部へ両手を組んで背もたれに思いつきり身を預けた。

「彼女、軍人だったんですか」

「そうよ。ただのがきんちよはこんな特秘の施設には入れないわ」
だとしたら自分がここに入れた理由——紅葉を連れ帰ることは相
当なものなのだ。

「で、どう彼女。親ではなくただの同居人って形でいいの。身元保
証人だとかそんなもの。あんまり身構えなくていいわ。考えてくれ
る？」

「まだ、頭が混乱して……。叔母さんに娘が……」

「そうね、無理もないわ。先に情報を出さなかった私たちの責任で
もあるわ。でもね、あの子、美人でしょ」

「確かにそうですけど」

「あはは、認めるんだ。そういうところは素直でかわいいなあ」

紅葉は綺麗だ。リンの言うとおり美人の範疇にいる。サイコな髪
色でさえ、彼女を彩るために用意されたアクセサリの一つとしか壱
雄には思えなかった。それよりも、

「叔母にそっくりなんです」

リンの表情が若干強張った。

「会ったのは亡くなるちょっと前だからもう三十はすぎてたけど、
あの人もすごい美人だったな。髪の色は違ったけど、確か身長もあ
のくらいだったし」

壱雄の初恋相手だった。

美人で優しくて、母とは年が離れているので、自分が小学生のこ
ろは叔母は二十代だった。両親がいない壱雄を遊びに連れていった
り家へ遊びいったりした。それももう十年以上も前か。

「ねえ、壱雄君」

優美な記憶に浸る壱雄を呼び戻す。

「すぐに答えを出せとは言わない。少しだけ待ってほしいの。彼女

もいろいろと過去を抱えていて……。ここを出た方があの子のためになると思うから……。とりあえず一週間ここにいてくれないかしら。あなたがよければいいわ」

学校は夏休みに入っただし、教師として問題はない。部活も副顧問の人間が指導すれば学校から文句が出ることはないだろう。

「いいですよ。でも基地で生活するんですか？」

「大丈夫。立ち入り禁止の区域にさえ入らなければいいし、ここ結構広くて設備もいいのよ。たぶん田舎のビジネスホテルなんかよりもよっぽどましだわ。それに、」

リンの視線は壱雄の眼、ではなく眉間へ向けられた。

「いいえ、なんでもない。とりあえず形だけの誓約書書いてもらうから」

「？、わかりました」

リンが立ち上がると、ドアの外からノックがされた。

「失礼します。篠崎中尉は部屋で」

シュトルヒは壱雄と目が合つと口が止まった。

「どうしたの？」

「あ、いえ、鍵閉めちゃって。とりあえず今日は部屋からは一歩も出ないとのことです」

そう、とだけリンはつぶやきシュトルヒとすれ違うように廊下へ出た。

「彼、ここに一週間滞在することになったから」

「ちょっとまってください。一般人を基地へ置くんですか？いくらなんでも少将だっていい顔しませんよ。それにさっきまで責任を負いたくないって」

「気が変わったの。これはチャンスだから。私の好き勝手やらしてもらおうわ。壱雄君を信用しているしね」

シュトルヒを挟んで向こう側のリンの笑顔が見えた。

やっぱり無茶なことなのだろう。完全部外者の一般人が戦争最前線の特秘基地を闊歩するなんて、よほどの理由がなければ許されな

い。ましてやその理由が未成年の引き取りでは、基地のお偉い方の人間からすれば、気が気ではない。スパイなんてどこにでもいる。「じゃ、私は誓約書とここの地図とかいっぱい持ってくるから待つててね」

腕を振って消えて行った。

そしてまたもや男二人だけの空間、にはならなかった。

「私も用事があるので」

とだけ言って出て行った。

壱雄は両手を後頭部に回し、先ほどのリンと同じ体勢を作った。

「堇^{すみれ}さん、娘いたんだ」

ちよつとだけへこんだ。

一、二、欠、四 その1

スマイラックス基地、二〇一五年建設開始。

当初の目的、ソルトレイク上空をゲートポイントとした、未確認敵性飛行物体への奇襲作戦『白い幽霊退治』の実行のための前線基地として建設計画が浮上する。その後、度々訪れる戦闘休止の間を狙い、着々と今の形である多目的軍事基地へと姿を変える。施設の九割は地下へと身を隠し、敵からの攻撃を一身に受ける防壁は厚さ7メートル、それがドームを作り残りの一割を飲みこんでいる。戦争が終わった今、五年後の一部縮小までは陸軍新兵の0スタートから空軍の航空戦術訓練まで、とにかくなんでもできる超巨大軍事施設である。

すごいでしょー。

確かにすごいけど、鼻の穴をふくらませてゴリラみたいな顔をされると、どんなリアクションをとればいいのかわからない。

これ、口外厳禁のオフレコよ、なんて言いながらも、全てが全て言えるわけではないらしく、ところどころ言葉を濁して、つぎはぎでできたボロ雑巾のような内容だった。そしてまとめると、以上の三百文字弱で収まる。

「僕って結構ヤバイところまで足踏み入れちゃったのかな」

嬉々として片足を突っ込んだ泥沼は、思っていたよりも深かった。ベッドへ寝転びながら枕に顔の半分を押しつける。

今現在、竜雄はリンからの案内を経て宿舎練の三等号室にいる。

階級別で部屋の広さや備品に格差が生じるらしく、この三等号室は大佐以下少佐までが使用する上等な部屋だとリンは言っていた。竜雄にとって何より助かったのはバスとトイレ別ということ。その他はやけにでかいシングルベッドがあり、牛皮製のソファがあり、裝飾が施された机があり、壁際には完全無線化のテレビがおいてある。窓のない部屋は異様だった。部屋をこだまするのは天井に設けら

れた循環式のエアコンだけ。格子の向こうで羽根が回り、風をなでる音が響く。

気を紛らわせようとテレビに目を付けた。

「テレビ、オン」

つかない。

発音が悪いのか声紋認証設定をしなければならないのか、うんともすんともいわない。

「ティーヴィー、オン」

つかない。

ジェスチャースイッチなのかも。というわけでテレビの前に立ち、左手で円を描く。

つかない。

「ああそっか」

巻き舌で、

「テレヴィジヨオン、オン」

「ぶほあっ」

「えっ」

半開きのドアから真っ赤にふくらました口を手で押さえ、爆発寸前の蛙みたいな顔でこちらを覗いているリンがいた。

「それっ、主電源っ、ついてなっ」

崩れ落ちていった。

頬が熱を帯びていくのがわかる。なぜ、毎度毎度こいつは悪いタイミングにいるのか。

「ノックしてください！」

「い、いやっあのね、ドアがちょっと空いてたからさ、驚かしてやるうと思っただけけど……。ふはっ、だめだ」

「〜〜〜！っ、で、なんか用ですか！？」

「ああ、そうそう」

リンは深く息を吸い、呼吸を整える。

「お腹すいてるでしょ？お昼食べてないからさ、食堂の場所教えた

けど、一人だと行きにくいだろうし、お姉さんが連れて行ってあげようと思いましたんですよ」

笑いを我慢しているのか、なにやら日本語がおかしい。未だに口元やら目じりはびくびく動いてる。

「奢ってあげるよん」

そういえば、宿泊料は全部タダだけど娯楽施設費や食事代はきちりとるとは言っていた。自分の口座には一生分の貯蓄があるわけだし、壱雄自身、それほど金には嫉着しているわけでもない。だけれども目上の人間の計らいにはイエスと答えるのが礼儀である、と壱雄は思う。

「御馳走になります。もう行きます？」

「うん。でも、服はちよつとスーツじゃ目立つね。ここみんな私服だからさ。着替えちゃって」

「あ、はいじゃあ、着替えるんで廊下で待っててください」

「私の前でもいいじゃない。子供じゃないんだから」

「子供じゃないからまずいんですよ。いいから、お願いします」

「しょうがないな」

リンはぼそりと、

「テレヴィジヨオオン」

うおあああああ。

基地内には食堂が多々あり、それらも中華、フレンチ、イタリアン、和食などなど、軍人の人種の数だけあるらしい。そこまできると、食堂というよりはレストランで、とにかく量より質より種類がすごい。リン曰く、本場の人間を呼んでいるので、味の文句は出たことがないとのこと。

すばらしい。戦地目前ということを見れば地上の楽園である。

「娯楽施設はなんでもあるからね。——天国に一番近い基地、か」
リンは自分で言ってしんみりしていた。

「どこの料理行くんですか？」

「んー、やっぱり日本人だから和食？いや、それは芸がないな。フレンチとか作法わかる？」

「お恥ずかしながら経験なくて……」

「そっか。だったらイタリアンにしよう。知り合いがいるから安くできるんだよ」

「すごい友達いっぱいいますもんね」

「いいこというね」

いいこと、か。竜雄は若干皮肉めいて言ったわけだが、それを読みとれるのは日本人同士の細かいニュアンスを理解せねばならないこれでわかった。リンはやっぱり日本ではなくアメリカという土地で生活をしている。なのになにぶんと言音が流暢で現地の人間とそん色ない。

「気になつていたことが、」

歩きだしたリンに従うように半歩下がってついていく。

「なに？あんまりつつこんだことはNGよ」

「ここってみんな日本語喋れるんですか？リンさんはわかりますけど、シュトルヒさんも綺麗な日本語だったの」

「あーそれはね、」

階段までさしかかって一段下りると動きが止まった。

「日本語使えると便利なの。全員が全員しゃべれるってわけじゃないのよ。ここって学習施設もあって勉強もできるから、」

そこで切ると、また下り始める。

「トップの人間が日本人なのよ。珍しいでしょ」

「その人って英語しゃべれないんですか？」

ものすごく失礼な発言だが、竜雄はそれに気付かない。

「英語はもちろん必須。でもねなんというか、ほら、目の前で日本語で悪口言われても普通はわからないじゃない。だからすごい勉強して日本で使われる罵倒の言葉を覚えて、その場で反論してやるう、みたいなの？」

「はは、リンさんらしいですね。じゃあシュトルヒさんも？」

「彼はまあ、」

リンは恥ずかしそうに鼻の頭をぼりぼりと掻いた。

「……うん、本当のことを言つとね、私も彼も紅葉ちゃんのためだつたんだ」

思つてた通りだ。

「やつぱり」

「あら？なんだわかつてたの」

「だつてすぐよくしてるじゃないですか彼女——」

紅葉のことはなんて呼ぼうか。吉雄にとって従姉妹なわけだし、同じ姓名なので篠崎は違和感がある。だからといってそのまま『紅葉』って呼ぶのもなんだか恥ずかしい。

「紅葉さんに」

「なんでさん付け？」

やつぱり食いついてくる。少しだけ間が空いたのが余計におかしかった。

「呼び捨てつてのも初対面だし、名字もいっしょだから」

「じゃあ『紅葉ちゃん』でいいじゃん」

「ちゃん、はちよつと……」

「年下なんだし、さんづけはないなあ。日本だと『くん』だとか、『ちゃん』でしように」

「それは、けつこう身近な関係つていうか」

「従姉妹じゃん」

びいつ。

「いいじゃん呼び捨て。ぐつと距離が縮まるよ……。それにここでは英語が基本だから、あの子自体どうでもいいんじゃないかな」

「だつたら『さん』で」

「だめ。なんか気持ち悪い。私が。あ、そうだ、あだ名がいいよ。あだ名あだ名」

推定二十代後半は楽しそうにはしゃぎだす。

「もみー。……なんか違うなあ。……もみもみ。もみもみもみもみ。流石私。うん、もみもみって呼ぼう」

「呼び捨てにします」

一蹴した。

「いいと思うけどなー。もみもみ」

リンは両手でやさしい親父の手つきで空を^{くう}もみしだく。

「そろそろだよ」

言った直後リンはゴキブリのようなロケットスタートで階段の残り十段を三步で下りた。

壱雄も慌てて、追いかける。

リンは胸まである手すりに組んだ腕を乗せ、下にある何かを眺めていた。そして、

「どうおおおおん」

ふり返り、両手を広げた。

リンの背には何もなかった。いや、何もないわけではなく、そこは下へ20メートルは続く吹き抜け構造だった。

「わぁ」

感嘆の息がもれた。

底では人々が行きかい、カフェがあり、雑貨屋があり、買い物をしている。向かいの電光パネルで固められた疑似外観モニターまでは、30メートル。そして左右に伸びる一本の大通りは先が見えない。自分らのほうに弧を描いて作られている。

「案内地図で見ましたけど、ほんと、すごいですこれっ」

「みんなは歓楽街って呼んでる」

縦は四階、底面は半円を作り、その弧と中心点へ向う線に道が敷かれ、その脇に店が並ぶ。半円の外側ほど、映画館やゲームセンターや多目的スポーツ施設などの娯楽施設が優先的に置かれ、中心点へ近づくほど小さな店へとなっていく。時計周りにAからLのブロック分けがされ外側が中心点へ1から最大25とたまもや細かく分けられる。階ごとの売り物やサービスの区別はなく、以上のルール

以外はただ乱雑と店が並んでいた。

向かい海辺を映している。ガラス張りの向こうではさざ波が浜を打ちつけていた。

「今日は金曜だから、夜には花火も見れるよ。疑似だけど、お酒が入っちゃえば本物よりも本物っぽくみえるんだ」

年甲斐もなく食い入るように見つめる壱雄の腕にリンが無理やり組み入れる。

「え？」

「なんかカップルみたいだねー」

鼻と鼻があと10センチ。壱雄の口がパクパク開く。

「大丈夫？」

もつと近づいてきた。息ができない。そろそろ限界。

「よしっ」

リンは組んでいた腕を解くと、持ち歩いていた携帯端末を壱雄に向ける。

「イタリアン食堂 polio sultano、は3階Dの3だよ。覚えておいてね」

壱雄も自分の端末を取り出し、座標を打ち込んでいく。

「Dの3、と」

「うんうん。お勧めのお店は食べながら教えてあげるよ」

そして、また腕を絡めてきた。

「あの、これ、恥ずかしいです」

「我慢したまえ童貞野郎。今日は私がエスコートしてあげるんだ、文句いわない！」

ひどい言われようだが、事実なのでしょうがない。リンに歩調を合わせ、置いていかれないようにする。そうすれば、

あなたのことがきら

横に立つリンの顔がぼやけて、変わった。闇の奥から片腕をつか

まれる。もう絶対思い出しくもなかったのに。あの日あの時から閉め切っていた開かずの扉が引き裂かれた。

「リンさん、ごめん、やっぱり離れて」

「なによ、年増は嫌いなのお？」

「いえ、そうじゃなくて、」

大丈夫だばれてない。呼吸も脈拍もすぐに戻るはず。平常心を保て。

「貧血とつかれてたみたいで。手すりに沿って行きますんで」

なんとかかなりそうだ。手すりですべてを起こす。もはや食欲は地の底にあつたが、今更そんなことも言つてられない。

「じゃあ行きましょうか」

渾身の笑顔を見せつけた。

リンもそれに納得したようで、作り笑いを見せる。

景観の砂浜はすでに赤みを増し、太陽は海に足をつけている。少しだけ歪んだ視界からはリンの言う通り、それら電子の産物はホンモノにしか見えなかった。

一、二、欠、四 その2

螺旋階段を下り、三階に降り立つと最外円を沿ってD区を目指す。業種を問わず、ほとんどの店がガラス張りで、歓楽街全体が一つの集合体でできているかのようだ。店員は一般人を雇っているのか、化粧をしてるし、ガタイもいわゆる一般男性・女性の体形である。壱雄がなぜこんなことに気づいたかと言うと、それだけ一般客の軍人が普通ではない雰囲気を感じ出しているからであった。

皆、なぜか壱雄を見ている。否、壱雄とリンを見ている。

喫茶店で女のケツを語り合う若い陸軍兵士は自分に向けて中指を立て、前から来た二の腕が壱雄の腹周りよりも太そうな短髪白人に肩をぶつけられた。前を歩くリンは気付かず進んでいく。明らかに自分が場違いな上、壱雄の持つ『腰ぬけ根性』が炸裂して、やりかえすこともなく安置と言えるリンの影に隠れるように、おそろおそろについていった。

「そこ右」

顔を横に向け、壱雄の生存を確認。

曲がり角に建つ美容院の店員に手を振ると、壱雄の手を掴んで角を曲がった。

最外円よりも少し広い、横幅6メートルほどの通路。ショッピングモールのような光景で、200メートルほどずっと続いていた。

「美容室、カラオケ店、デイタリアン」

そこだよ。といい人差し指で指し示す。

壱雄が思い描いていた店とは少し違った。入口の上についた看板はイタリア語だけど、昔にテレビで見たお洒落なカフェ風の造りではなく、日本のレストランみたいに収容人数を意識に向けた暮目調のテーブル並びで、確かにイタリア人からしてみればレストランといよりは食堂といった方がしっくりくる。軍事施設であれば当たり前前の構造ではあるが、スマイラックス基地の歓楽街という特殊で奇

異な群体には珍しいのではないかと壱雄は思う。

「まいどっ」

自動ドアが開くと、レジ前に立つ女性店員にリンは言い放った。

「あらあ、リンク久しぶり。後ろの子はカレシ？」

「違うわよ、モミジの保護者候補」

「仲良さそうに手つないできたくせに。もう手だしちゃった？」

「ひどいわね、アンタ。そこまで飢えてないわよ。ちょっと目を離すとどっかいつちやいそうだから、ね」

「へーなんかかわいいなあ。学生？」

「高校の教師をやってるわ。童顔だけどちゃんと大人よ」

「いかにもな感じ」

「当たってる」

以上は英会話であり、よって壱雄にはわからない。

「なんて言ってるんです？」

「人が多いから相席でいいか？って」

「ああ、」

時間帯も相まって相当混雑している。待つ、という選択肢はなく、基本は相席らしい。見回していると、壱雄はあるものを見つけた。そこだけ人の頭が少なく、ひよこひよここと赤い物が見えたり隠れたりしている。

「そつえば、モミジなら来てるわよ」

「本当？あの子またテーブル一つ占領してるの？」

「うん。誰もあそこには座ろうとしないわ」

「じゃあこの子」

壱雄の腕をつかんで前につきだす。

「案内してあげて」

「リンは？」

「水差すようなことはしないわ。どっか適当なところで食べてくる」
なにがなんだかわからないという壱雄の顔をしり目に、リンはもと来た道へふり返った。

「リンさん？どこいくんですか？」

「ごめんねー。ちょおつと用事思い出しちゃってさー。また今度奢るから」

顔の前で手を合わせてウインクをした。そして、腕をふってそのまま行ってしまった。

「コツチコツチ」

リンと話していた女性店員が手招きをして壱雄を案内すると、店の奥に位置する通路に面した四人掛けのテーブルへ通された。いた。

テーブルの半分が皿で覆い尽くされ、休みなく口に料理を詰め込んでいく篠崎紅葉の姿があった。紅葉は顔を上げて、球体に仕上がったペペロンチーノ付きフォークが空中で止まる。目が合ったが、青みがかった瞳になんの感情もこめず、再び食べる作業へ戻る。

「あのジャップ、あそこ座る気だよ」「いい根性してんな。同じ人種だからって優しく扱ってもらえるとおもってんだぜ」「ほんと平和な脳みそしてやがる」

周りで何か聞こえる。騒がしかったのに壱雄が来てから急に静まり返り、体中がかゆくなるほど視線が当たっていた。

「メニュー」

とだけ言って店員は行ってしまった。

「え？」

取り残された壱雄は周りの屈強な男共と、ありえない速度で腹を膨らせていく目の前の怪獣に圧され、身動きできずにいた。

「メニュー取りに行ってくるって意味。座って」

紅葉が視線だけ向けて注意した。

「あ、ごめん」

紅葉に対してはす向かいに座った。

「おい、姫がしゃべったぞ」「なんて言ったんだ。お前、日本語は？」「最後の『スワッテ』は『あなたとお話したいの』とかそんな意味だ」「本当かてめえ、いつも日本のエロビデオの怪しい翻訳で

しか勉強してねえじゃねえか」「まあまで、あのもやし野郎が声をかけられたのは事実だ。様子を見ようぜ」

プリンセスって聞こえた。どういう扱いを受けてんだ。

壱雄のお姫様像は、おてんばで唯我独尊で利己的であったりする。トイレの件の強引さを考えれば、それも合っていないこともないが、お国柄のせいかイメージとは少し違った。

「お姫様なんだ」

いつにも増して、壱雄の地雷踏みが冴えた。

「その呼び方嫌い」

顔をふくらませて嫌悪の表情をとる。目線を落とすと八切りにされたピツツア・マルゲリータに手をつけ始めた。

「あ、そういう意味じゃなくて、なんて呼んだらいいかと思って、リンさんは呼び捨てでいいって言うてたけど、」

苦しい言い訳だった。毎度のことながら脳みそと口が直通できており、思考がダダ漏れである。

紅葉は先端からまるめていたマルゲリータのピースから手を離すと、壱雄に体を向けて少しだけ表情を緩ませて言った。

「紅葉でいい」

「嫌だよね、って、あ、いいの？じゃあ僕も壱雄って呼んでもらえれば」

「うん」

笑った、ような気がした。もしかしたら、口角があがり、目元が下がっただけだったのかもしれないけど、それでも、自分を認めてくれた紅葉の反応が壱雄は嬉しかった。

「変なの」

「え？」

「顔、にやけてる」

隠すように顔を伏せて頬を触ってみる。本当だ。ひきつって堅くなっていた。意思と裏腹に赤面していく。

「ハイ」

先ほどの店員が、クリアシートに刺しこまれた手書きを印刷したメニュー表を持ってきた。壱雄はそれを受け取ると、紅葉と壱雄の間を隔てるように表をたてて、メニューを眺めるふりをして一心に精神を落ち着かせようと邪念を振り払った。

「なんかオススメは――、」

店員は笑顔を傾けて頭の上にハテナが浮かべた。

あ、そうか。通じるわけじゃないのか。

特に何が食べたいというわけではないので、適当に人差し指の腹でメニューをなぞっていると、

「これ、おいしい」

メニュー表を傾き、赤い髪が流れ込んできた。紅葉が身を乗り出してきてメニュー表の奥から顔を覗かせる、そしてすぐ額と額が近い。

「どうしたの？」

周りで歓声が上がった。驚愕と憎しみが半々に混じり合い、身の危険を感じる。そんなことよりも紅葉の吐息が顔にかかるし目の前の唇が艶やかで動いたびに挑発してきてるようで、それで、

「こ、これを……」

収まろうとしていた噴火寸前の感情が再び湧きあがる。限界だった。顔を沈めて紅葉オススメ『ゴルゴンゾーラソースのカスピ海風リゾット』を注文した。

ようやく、紅葉は奥へ引込み、最後に運ばれてきたジェラートヘスプーンをつつこと、一口サイズへ切って口へ運んでいく。あれだけの量を食べて未だなお、胃袋には余裕があるようだ。

「甘いもの好き？」

やっと元の血圧にもどったので、おいしそうに（だと思っ）食べる紅葉へ問いかけてみた。

「好き」

目をぱつちり合わせられてそんなこと言われると、もし壱雄が感性豊かな中学生だったら一発で堕ちてしまうだろう。甘い物が好きだなんて意外と可愛いところがあるんだと壱雄は思った。こういうところは普通の女の子なのである。

なめていた。やはり紅葉は紅葉なのであって、普通という型に嵌まる女ではない。

これで四品目になった。

ひたすらドルチェが運ばれてくる。壱雄の注文が来る前は最初のジェラートを平らげ、何をするわけでもなく死後硬直が始まった凍死体みたいに、一切動かなくなった。壱雄は自分が食べ終わるまで待つてくれているのかと淡い期待を持ちながらも、必死で話題を頭の中で浮かべようとしていたら、当たり前のように二品目三品目が到着し、胃に放り込んでいった。

そして、ようやくリゾットが来たと思えば、紅葉のオレンジ香るパンナコッタも並んでやってきた。

「太らない？」

「うん」

「若いていいなあ」

日本で教えてきた子たちも事あるごとにスイーツスイーツと口を並べ、体重を気にしているかと聞けば、そんなもん一日食わなきゃ元に戻るらしい。

「壱雄も若い」

初めて名前を呼ばれたわけだが、それに気づかず壱雄は会話を進める。

「僕はもう二十四だよ。昔よりは痩せにくくなったね。そもそもそんなに食べないから太ることもないんだけど」

「二つ上ぐらいだと思った」

「生徒にもよく言われるよ。って紅葉はいくつ？」

「十六」

十六歳。

この世界は不公平なのだった。

世の中の十六歳は青春真っ只中でスポーツをして勉強をして恋愛に勤しむ。こんなアメリカの田舎の土の下で、そんな大切な時間を浪費していいはずがない。だから、リンが日本に帰りたいという気持ちもよくわかる。だけど紅葉自身そういった希望があるわけでもなく、周りの人間がいらないおせっかいを焼いているようにも思えた。それに紅葉が言っていたシアという人物が彼女の心残りでもあるらしい。

「お酒飲みたい」

止まったままのスプーンを握った手の下に指を添えてメニュー表を差し込んできた。指の先には”Galliciano 40% ABV”。

「は？」

「二十一歳にならないと買えない。だから頼んで」

「頼めないのは法律的にダメだからだよ！」

「ケニーに頼んだら注文してくれた」

「ケニーって」

「あの人」

紅葉は壱雄の後ろを指さした。その先には待つてましたといわんばかりに、うれしそうに駆け寄るメガネ野郎がいた。

「よう、紅葉。なんか用？」

こいつも日本語を自国語のように使いこなしている。

「お酒」

それだけ言つて、壱雄にもしたようにメニュー表を差し出す。

「ああ、ガリアーノ……？これ、相当きついけど大丈夫？」

「この前のはジュースみたいだった。これが飲みたい」

「いいよ。奢つてあげる。おい、リター。オーダーだよ」

メガネは厨房の方へ手を振ると、さっきの女性店員が歩いてきた。
英語で、

「ガリアーノをボトルで一本」

「誰が飲むの？」

「紅葉だよ」

「はあ、全くしょうがないね……」

壱雄は一連の流れからこのオーダーが受理されたことがわかった。
「ちよつと！彼女未成年です！飲ませたら刑事罰に処せらちやいますよ！」

「いいんだよ」とメガネ。

「彼女にはあらゆる特権がある。これもそのうちのひとつだ。彼女はヒロインさ。地球を救ったんだ、これぐらいのわがまま、大統領も許してくれるさ」

そして、メガネは紅葉の横に陣取ると、本当かどうか怪しい自慢ばかり連ねて、壱雄を完全に蚊帳の外へと追いやった。

せっかく仲良くなれたのに。なんだよこいつは。それに地球を救ったって。

あまりにも居心地が悪いので、何か余計なことを言った、と思う。
そこで壱雄の記憶は無くなっていた。

一、二、欠、四 その2（後書き）

二日おくれてしまいました。これから通常の更新スピードになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3149u/>

この星を守りました。

2011年7月25日03時28分発行